

「郭象と儒教」

東京大学東洋文化研究所 特任研究員 (PD) 伊藤 涼

日本語要旨

本発表は、西晋期の郭象（252–312 年）の思想が、儒教思想との関連のなかでいかに形成されているのかを考察するものである。

郭象に先行する何晏・王弼の思想は、それが儒教的枠組みの中で展開していることが従来から指摘され、具体的な儒教思想との関連も多く論じられてきた。一方、郭象の思想については、儒教思想との関連を指摘する研究が比較的少なく、その関係性についても十分に検討されてきたとはいえない。

そこで本発表ではまず、郭象の『莊子』に対する注釈態度に注目する。郭象が注釈を施した『莊子』の本文には、その性質上、儒教思想と対立する内容が多く含まれており、とくに儒教の聖人や経典に対する否定的な表現も見られる。これに対して郭象は、聖人については儒教的価値観との整合を図るかたちで注釈を施し、経典についてもその権威を損なわないように解釈を工夫している。こうした注釈態度は、郭象が儒教的な価値観に基づいて自身の思想を形成していたことを示唆するものである。

また、発表者はこれまでの研究において、郭象が次のような体系的な思想を構築していることを指摘してきた。すなわち、①万物はそれぞれ本来の性質（「性」）を備えており、その完成には他者からの干渉を受けない自足的な修養が必要とされること、②「性」には固有の限界や役割（「分」）があり、各個体が「性」に従って生きることによって全体の調和（「大均」）が実現されること、③そのような人間観・世界観に基づけば、統治者が万物に任せる「無為の治」こそが理想的な統治とされることである。本発表では、こうした郭象の思想が、『周易』の人間観・世界観・聖人論および『論語』の政治思想に沿って形成されていることを明らかにするとともに、郭象が導入した理論や概念規定も、それら儒教の思想枠組みを補強・再解釈するものとして機能していることを確認したい。